

編集後記

「韓信の股くぐり」という、故事成語があります。これは若い頃の韓信（前一九六）が淮陰（現在の江蘇省）で意に染まぬ生活を送っていたある日、地元のごろつき少年たちに、と言ってもおおよそ三十歳くらいまでは少年とされていた時代のことですから必ずしも十代の若者ばかりだったわけではないのでしようが、それはともかくとして、「おまえはでかい図体をして刀剣をぶら下げているが、臆病者に違いない。このおれ様を殺すことができるのならその刀剣で刺してみろ。それができないのなら、おれ様の股をくぐって出て来い」と、繁華街のど真ん中でいわれのない因縁をつけられたのでした。韓信はその男の顔をじっとにらみつけるや、無言でこの屈辱に耐えてその男の股ぐらから這いずり出たのですが、そこに居合わせて事の成り行きを見守っていたすべての人々からさえも、韓信は「臆病者」の烙印をおされてしまった、という故事です。しかしのちに韓信は劉邦（のちの前漢の高祖）を補佐して前漢の建国に尽力し、蕭何、張良と並んで、漢の三傑の一人とされたことでも有名な人物です。この話は、前漢の司馬遷（前一四五～前八六）の『史記』淮陰侯列伝に記録されているのですが、この故事に基づいて「志を抱く者は、目前の屈辱を堪え忍び、自らの目的を成就する」意味として使われるようになりました。

ここで更に、『孟子』の次の一節が思い起こされます。

孟子（前三七二～前二八九）は戦国時代の思想家で、仁義（人として守るべき道である慈愛の心と正義）を重視しただけに、殊に人の精神を重んじた気丈な人物です。その孟子が、このように述べています。

「天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先ず其の心を苦しめ、

其の筋骨を勞せしめ、其の皮膚を餓えしめ、其の身を空乏にし、行つこと其の為さんとする所に乱れせしむ。心を動かし性を忍ばせ、其の能くせざる所を曾益せしむる所以なり」

この書き下し文の意味は、こうです。

「天がある人に大任（重大な任務）を負わせようとするときは、必ず先ずその人の精神を苦しませ、その筋骨を疲れさせ、その肉体を飢えさせ、その行動が所期（自分の期待すること）と正反対になるようにさせる。これは、その人の心を感奮（感じて奮い立つように）させ、本性（その人の素質）をじつと持ちこたえさせて、今までにできなかったこともできるように、鍛錬するためである」と。

この一節は、幕末の志士、吉田松陰（一八三〇～五九）や佐久間象山（一八一～六四）が特に愛誦したことが、松陰の著『講孟余話』に記されています。また、のちの明治時代では新渡戸稲造（一八六二～一九三三）がその著『武士道』に引用してもいます。

併せて、和歌の「憂きことのなほこの上に積もれかし 限りある身の力試さん」も趣旨は同じです。この歌は、三日月を仰ぎ見て「願わくは、我に七難八苦を与えたまえ」と祈ったという戦国時代の武将、山中幸盛（通称は鹿介、？～一五七八）の作と伝えられてはいますが、江戸前期の漢学者熊沢蕃山（一六一九～九二）とも言われて、真偽のほどは分かりません。

さて本号は、従前の編集体裁とは異なり、本館並びにアジア歴史資料センターで調査研究等の業務に携わっている、志を抱く前途有為な若き調査員の方々による論考を掲載しました。読者諸賢の叱正を冀う次第です。